亡師三回忌

月雪に出ずから作り　紙衣かな　（許六）

御命護ひ所の書まと新比丘尼

蔓荔に泊の付たる御影講　弘

眞昼ひ朝飯まつ間の江湖哉

細代守宇治の駕舁と出ようう

菖に帰て見せうう　みちぶる

ぶるひ地をとりまく野ぶるあり

綿帽子の脚を力ひ冬の蝿

法の人来りしに　旅人の扇にかける細代かな

江戸住

岸本調和（正德五年十月十七日没）七八

春

時候

動物

唐のものハあ（ちこ）用な　神の春　（梅林本改樂）

烏羽玉の山夜が明けてあら玉や

祝ひ日ゆつり葉ハ時ゝあふ鉛

若松の繪茶碗古年ハ古瀬戸

たゞおるう年幾わたりふの春

御連歌の松の雲ひ四海の春

かゞよぬハ月日の雪る（ー）老の春

元朝ひ起あうう法師老の児

年と春とゝかひ立花の二ひ真

杣山人たや見えぬ初子日
歌でいく日の子日
いなかるか春祢ぶ杜宇
三月廿日松風むかり白ひかり
春の日や達摩大師ル尾崎
鶯や堺戸井の運ひ白玉

昌置風水東北紀行の餞別ゝ松鳴ゝ
柑潟を矢筆の的にて走ぶ七つ半

一つ宛拾へ柑のかをなみ
歌よまぬ身のあり孔さよ赤蛙

雨の日の会ゝ

雨亭の日筆の棹さす　蛙かな
花と見て蝶なり蝶と見て荘子
ゑゝ明けて唐土の大臣なり

一日と始て三云り人者て
三公ゝ名りしのてゝ

春人事

きのふこそ雪菜ゝか雑煮物
松立て、宝の市と明けたりな
義惠比須ハいつも若く
大黒ハいつも黒ー
漆瓦ゝらすて久ー　山折敷
繼人ゝは正月礼を山さくら
滑稽傳、三千年の桃実を三度食て齢ゝ
ゝ
門松や潜りて　侏ゝ　侏
倍唐や蓬莱の千代　樫の
金剛精諸引童ー　氷様

五十畑芋蔕の御粥かゝ尾花
桃の波たゝず盃や遠干潟
拾ひて手呂出さぬか紙雛
夕立の流れの末や水田打
今日の干潟時計人形走らせん
汐干見ぬ田螺も貝の一つ
春の色青にぬの紙み試筆ふ
唐めのすめてたゝ雄蕉神の膳
茶の芽〳〵雀隠れに今気日

松五葉より
宇治人の家

春

天文
地理

すけ障子日影も遅し朝霞
糸遊ふ空や乙女のはつ衣
七情七百韵巻頭題喜
春雨や三日とゝふ夜星一つ
月と日の膳や雄呂の二夕鏡

溝河ハ泥くさくとゞる　氷水

春

櫻花

葉隠れの花也隠もる翠簾屏風
世捨坊さの出ぶり　山　櫻
花ハ青葉南右衛門の残り樽の露
雲やふく灰汁のたれ糟　花盛
臥竜の嵐也　梢　花のかげ
上野より来て志賀の山ふまする
松葉掻き落花や雪の一ト丸め
花柳いうよ六十九の　芝　肴
いへむえに臭毛植けり　花の葉
櫻狩　家路馬さ一ぬ　入おぬ

病後ノ死ンて見て別の事なり　山櫻

居なからの外出心の行處ハ　誰ゐのゝ家　櫻

遠山もこゝ見さらめやと花の　素十（兒の筆）

春

植物（附櫻花）

玄冬に炉せず盛夏に扇つかはずおとゝ郎先生の易を精にして術を味ふ其德高し我ハ厚衣を忘れ老年の今も餅益らずく清に涼まさる覺えたり

年中の無事よ　靜なる　梅の花

廿五日ハ天神講ふと共法師の即妙からくゝ き羽子羽も動んこそ

迫風に梅ゐり向けだ　伯兒の

數寄屋小袖　梅が古木よ朝詠

梅が香や　いつも月夜の　一手指

喜入氏周言留香炉ともの一て是に泥書ちとあれハ白い許りの物なるとも去男の法師がはのめ　たるも又なう

御　花ハ赤ら梅　色と香と

かも　賣柳の門や　職　敵

入相の姿を見する　柳かな

風のなき時は木になる柳かな（

餞別　それい宮女人
　　られい桃隣

若草やおた迯水のあかりさま
畏櫨の萩てふ若葉袖にせよ
深うらやかが垣根の菫草
波さはく塩瀬ゆうさや花の藤

夏
（事植物）

夏の夜や胡桃の油敷居の風
塩冬や江の陸す雪の不二

五月雨や上戸の早下戸の暮
木枕や苔の下もえ五月雨
（庭作の道花ハ花を築て去野をなすうれをこきを）
庭雲か名れ水根越サバ雲の峰

大橋を隔て一方

時付狀ますほの薄　郭公
須達長者花みつら　郭公
遠法師それい酒なり　郭公
雁木を嗤て　郭公
曉の明星　郭公
松ふくや茶釜のたぎり　閑古鳥
榮螺売頒の下水　行く蛍
香や忍ぶ幅の関もる戸棚
木陰ゆかお持仏比丘尼　蟬衣
子規　とて寂人りけり

夏

人事

植物

きのふこそ疝癖かろし　更衣
思ひてや美濃の芸長　新茶婦
くり返　祝ひまさ〳〵の糸粽
今朝よりハ初帷子を奈良櫻
鮓桶やいせ男の暑の捨衣
水晶紙團の氷　成みくり
抱籠や吹雪たふれの小逕原

比氷を月の空百千返り鳴くほとゝぎす
羽黒の烏あとにあくるも道尊　次岩の山踏するあ
りさまハ人方の梵天を立たてあかねの帝釈の地を力三
程の太棒と月山の鍬と鍛ひて荒法のあと蔵を包ひの材も法ばず文字
書たる柄杓に大日如来の光をうけて

白妙の天竺干くり　陽馭　行

彼老達り此初雪を夏と見て一現
此東就島ハ何とかなるべく戯言して

萬葉の富士見て来ます涼しさ

梨ふ壺の紫の色か　杜若
杜若昔になりぬ姉弟
まさらら板軒の若葉や恥ずし
風開く南障子や夏櫻
瓜皿や関の岩かと松やうし
根蓴の花一篠の藪鯉

〜〜書顔のまさふ草復もあり孔雀

調和（後錦）（続の草）

秋時候 人事

中納言関吹きこゆる今朝の秋　蒲多
秋来ても自惜之落ぬ　婉軒
秋の夜や夢多の唐橋勢田かな
須磨人はよくも活くる秋の暮
徳壺利や耳ふむ秋の暮
茶師だかり惜まぬ秋と名残

七夕吟

花瓶や今日は七箇の池の坊
逢ふ星の二面なり奈良さらし

盆俗―四谷の菅菰竹柱

團扇大波風や調て かけ躍

内馬場に引とや関路の茶屋懸

銭ゑ替る花屋か水やくるの菊

銀盖や玉のむら菊今朝の水

八百屋いかに青柚のなくれくるの菊

何を笑ひ女くの星祭

秋

天文

又一せ雲間―てぬれ色もかなくるの月

うぶ毛屋か鏡ゑ透さんくるの月

もゝ月やあり―葉分の竹 尾

名月雨 桂葉―生ふらん雨の こよひ 空

折ゝ所労に 月俗―あらくれた宿小菜と芋

小野川校校餞別 花の白い島の帰りものくるる

必よりなくらすくれの月の子

かすゝ背 滑キ 人形 天の川

稲妻の形ハ育ゑ笑たられず

くるの月星なき里ともりはり

十三夜の歌にする月山僧のさゝ栗欣

赤人ハ人麿よ　先の月

秋

生物

秋の蟬　手きめの杖や　大名

深草や花野に歸る雨の聲

きりゝすな伺ひ夜の裾のさん

初雁や江戸近郷の鍬たゝみ

脇あはめ　恋や男鹿の華羽織

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

ある市方より書翰紙下され
その中の杉葉に

桐の葉や見ぬ唐土の書翰紙

薩摩櫛もとの心を西瓜水

萩の露 たさや掃除の肩休め

和巾の歌 誰ぞうまずさみの花芒

野屋敷や忍ぶみ絶えぬ女郎花

寄茶釜萩

はけ煮と萩の葉なる小芦屋釜

初茸や鶏の草茎家路の暮

自嘲

遊ばずに正木のかつら松の吟

朽木灰白へる山よ下紅葉

冬

（天文十七）

日本紀や銀杏に埋む神無月

養朶人の鎌のいとおや落葉が風

和推友ないて

冬紅葉を一照る山の海墨寺

水仙や花の着せ綿包み紙

生海鼠いふ酢吸の孔子大作り

江の邊つなぐぬ舟●に雛くらべ

堪忍の二字や夜毎の藥喰

藥喰延齢といふを

特牛 年のあゆみや藥くい

寒明や見ぬ世に帰る古宇勢

慈母来れなる病たらで年迄

麦の果報よあやかれとて枕の

食ひ出し一ハ我ゆめとなくて

臘梅の残花強くて静なり

新らしき茶代のひとつ年忘

冬

天文

番匠童風童き　夕外

巻向の真桧皮いろ漏る時雨

滝湯て見た弾二郎ぶ松は一時雨

狂ひ向のなりてなる村時雨

壺茗軒ゐる即興

ちらし陣ゐ明くれだ星ぞ降

霜の松もろふ朝日やこなつ

呉竹やいさよふ霙乗渡舟

いざ上野さらてハ人さの雪

見る程に雪書黒

国立国会
26.7.26
図書館

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用